

小鹿野町における地域資源を活かした観光ルートの企画

小鹿野町 東洋大学

1 活動目的

人口減少下の中山間地域の地域づくりにおいて地域資源の活用と関係人口の増加は喫緊の課題である。その道程には、必定、従来型の単眼的ではなく複眼的な学際性が求められることは言うまでもない。本活動の対象地とした小鹿野町もまた典型的な中山間地域であり、人口・世帯数はいずれも減少している一方、ダリアをはじめとする「花」や毘沙門水としても名高い「水」、そして、小鹿野歌舞伎をはじめとする豊かな地域資源に恵まれている。また、小鹿野高校による尾ノ内百景氷柱の活動支援等の地域づくり活動も活発である。

本活動は、これら一連の活動を支援すべく、長期的には、地域資源を活かした地域経済の活性化と関係人口の増加に資することをねらっている。また、(多少ではあるものの)地域経済活性化・関係人口増加に寄与すべく、年間で延べ50名の教員・学生が現地を訪ねることも目標に置いている。初年度の2019年度は、小鹿野町における潜在的な地域資源を「地域資源マップ」として可視化した上で、観光振興に向けた論点を明らかにすることを目標とし、続く本年度は、過年度の活動を発展的に継続するものであり、地元目線からの地域資源の発掘及び地域づくりの担い手とのネットワークづくりを主たる目標とした。

2 活動地域の現状

小鹿野町における「地域資源を活用した観光振興による関係人口の増加」を一つの到達目標として据え置いた際、検討すべき重要な課題の一つに、「誰を対象にどのような施策を講じるか？」がある。この問いを念頭に置きつつ、「小鹿野町まち・ひと・しごと創生総合戦略」(小鹿野町(2016))を開くと、2005年以降、同町の生産年齢人口が顕著に減少し(2005年:8,744人、2015年:7,098人)、なかでも20歳代前半を中心とする若者世代(15歳から39歳)の転出が町人口の社会減を引き起こしている主因であることが分かる。

これまで小鹿野町では、地域住民の主体的な協力関係のもと、町内行事の開催や自治会運営などを含む多様な地域資源管理活動が継続されてきた。こうした活動の継続という視点から若者世代の「役割」を捉えると、若者世代とは、今はまだ活動の主力とはならずとも、将来的には活動をけん引していくことが期待される、潜在的かつ重要な担い手として位置づけられる。こうした「地域資源管理活動の将来」を担う若者世代の流出は、現行の地域資源管理活動の衰退を引き起こすだけでなく、持続的な地域社会システムの必要条件である「円滑な世代交代」を危ぶませる重大な課題だと考えられる。

3 活動内容

活動にあたっては、昨年度に引き続き、国際地域学科、国際観光学科、そして、川越キャンパスに拠を置く都市環境デザイン学科の教員5名(松丸亮・久松佳彰・神山藍・佐野浩祥・新田将之・志摩憲寿)と各研究室・ゼミを中心とした学生によって支援隊を編成した。

本年度の活動自体は、オンラインで実施することとなったが、夏休みには小鹿野高校と

の「みちくさマップ」ワークショップを開催し、地元目線での地域資源と地域づくりの担い手の発掘を行い、その成果を本報告書に整理した。

- ・ ワークショップ第1日目 事前学習 参加者顔合わせ・課題説明の他、ワークショップに向けた準備作業。また、ワークショップまでに「みちくさマップ」を作成した。
- ・ 第2日目 オンライン研修 各自が作成した「みちくさマップ」から学校・キャンパスの周りで見られる地域資源（モノ、ヒト、コト）を読み解き、自分自身の学校生活と地域との関わりを考察した。
- ・ 第3日目 事後学習 ワークショップの総括。小鹿野高校生の描いた「みちくさマップ」を中心として、小鹿野町の地域資源を整理、分析すると共に、地域資源という点からみた小鹿野町の魅力を考察した。

この他にも、東洋大学国際地域学科「PS（プロジェクトスタディーズ）ワークショップ」（2020年10月21日～31日、於：オンライン）等の機会にて本活動を報じ、随時、活動内容の具体化や見直しに努めた。さらに、本年度は、小鹿野町における潜在的な地域資源として「看板建築」に着目して卒業論文を執筆した学生が現れたことも特筆しておきたい。



写真1 オンラインワークショップの様子

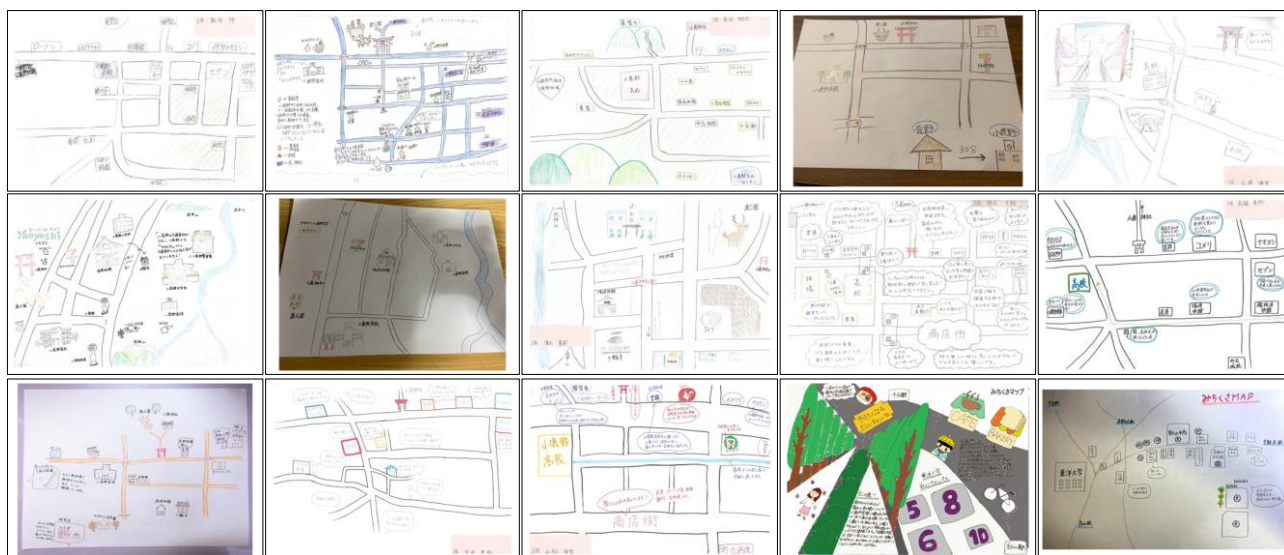


図1 作成したみちくさマップ

4 成果

地域資源という本活動のキーワードに照らしてワークショップを振り返るならば、地域資源は、「みちくさまっぷ」として整理されたように（図2）物理的空間のみならず、オンライン空間にも見出したり展開し得るということが改めて確認されたように思う。

また、参加した小鹿野高校生・東洋大学生は皆、ワークショップを経てその経験を蓄積したという点も本年度の成果として加えておきたい。



図2 みちくさまっぷの総括例

5 課題

何よりコロナ禍での活動を余儀なくされたことが本年度の最も厳しいところではあったが、活動実績の浅い本支援隊では、とにかく地元との縁を切らないことを第一義として本年度の活動に臨んでおり、その意味では、本報告にもあるように地元・小鹿野高校のご厚意を頂きつつ所与の目標を達したものと感じている。

一方で課題をあげるとすれば、活動実績の浅さゆえに現地とのネットワークが十分に築かれていないこと等の理由からオンラインワークショップしか活動ができなかった、すなわち、現地で動きが取りにくかったと言えば取りにくかったかもしれない。この点は現地でさらに活動を展開してゆくで克服してゆくこととしたい。

6 次年度以降の計画

次年度以降の活動では、看板建築の空き店舗等を活用しつつ、小鹿野町で売り出し中のカボスや蕎麦などを使った学生食堂のような取り組みや例えば、NPO 法人尾道空き家再生プロジェクトの活動等にみられるような旧小鹿野町のみならず旧両神村を含めた空き家などを巡るハイキングツアーをはじめとする実践的な地域づくり活動を小鹿野高校の皆さんと展開してゆきたい。まずは3月下旬から4月上旬にも学生中心での企画会議を行い、令和3年度の活動を具体化することとしたい。